

中等教育研究開発室年報 第35号（2022年3月31日発行）別冊電子版
2021年度 授業実践事例

芸術（音楽）科 高等学校第Ⅱ学年

生徒指揮者の音楽解釈と合奏運営

授業者 原 寛暁

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 芸術科（音楽） 学習指導案

指導者 原 寛暁

- 日時** 令和3年11月27日（土） 第1限 9:30～10:20
- 場所** 第1・第2音楽教室
- 学年・組** 高等学校Ⅱ年 芸術音楽選択クラス33人（男子15人 女子18人）
- 題材** 生徒指揮者の音楽解釈と合奏運営
「Uptown_Funk」（マーク・ロンソン／ブルーノ・マーズ）
- 目標**
1. 自分のパートだけではなく、異なるパートや全体のアンサンブルを意識しながら演奏ができる。（楽器演奏表現の能力）
 2. 生徒指揮者の部分練習を通して、演奏課題を自分で考え発見することができる。（課題解決の能力）

指導計画（全8時間）

- 第一次 参考演奏の視聴，譜読み 2時間
- 第二次 合奏（楽曲構造把握）とセクション別の分散練習（リズム中心） 3時間
- 第三次 生徒指揮者による合奏運営，演奏評価と課題分析 3時間（本時 2/3）

授業について

本題材は、リズムミク魅力を持ったファンク調の音楽である。リズム把握は簡単ではないものの、生徒実態を考慮した楽器編成に合わせて教材化編曲をしたものに取り組む（教材化編曲にあたっては、広島大学教育学部音楽科3年生で本校の教育実習を履修した学生の協力を得ている）。高校生の感性に相応しい教材であると考え。

対象クラスの生徒たちは、器楽・合唱共に意欲を持ち主体的な活動ができる。器楽活動の教材については、高Ⅰから2年間を見通して徐々に技術的難易度が上がっていくように配慮して配列してきた。高Ⅱから教育課程の関係で文系生徒のみになり人数は減ったが、新しい集団実態に合わせて楽器を一部変更するなどして対応している。部活動での楽器経験者（主に初心者指導を担当してくれている）は在籍するが、大部分の生徒はこの芸術科授業で楽器を嗜む初心者である。

この教材を扱った活動を通してより幅広い音楽への視点を広げ、「楽器を演奏することは生涯に残る財産になる」ということを実感できるような合奏活動を行えるように支援したい。生徒たちの向上意欲は大切にしながらも細部に拘りすぎず、リズムに特化して楽しめるような活動にできるように、生徒たちをフォローアップしたい。

題目 生徒指揮者の音楽解釈と合奏運営

本時の目標

1. 自分のパートだけではなく、異なるパートや全体のアンサンブルを意識しながら演奏ができる。（知識・技能）
2. 生徒指揮者の部分練習を通して、演奏課題を自分で考え発見することができる。（主体的に取り組む力）

本時の評価規準（観点／方法）

1. 全体のアンサンブルを意識しつつ、楽しみながら演奏ができている。
(知識・技能／演奏の観察)
2. 生徒指揮者の提示した全体課題を参考にしながら、自己課題の解決方法を発見することができる。
(主体的に学習に取り組む力／活動の観察・ワークシート)

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・合奏準備(楽器・楽譜・譜面台など) ・基礎合奏(長い音&短い音) (5分) ・教材の通し練習(生徒 or 授業者) (5分) ・指揮リレー(指揮者①部分練習) ・指揮リレー(指揮者②部分練習) ・指揮リレー(指揮者③部分練習) (30分) ・指揮リレー(指揮者④通し演奏) ・指揮リレー(指揮者⑤通し演奏: 録音) (5分) ・授業者の総合評価を聞く→個別に自己評価をする(ワークシートの記入) (5分) ・除菌作業, 楽器等の片付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴァイオリン生徒の運弓を目視して合わせる練習を行う。 ・生徒指揮者は, 教材の中の一部を指定して, 練習テーマを設定し(音楽要素に関連したファクター)部分合奏を指導する。→パフォーマンスを評価する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">見通す</div> →次の生徒指揮者を指名する。 (①→②→③) <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">試行錯誤する</div> ・生徒指揮者④は, ①～③の成果を累積して, まとめとして通し練習(リハーサル)を行う。→パフォーマンスを評価する。 ・生徒指揮者⑤は, これまでの練習の成果をまとめるつもりで指揮を行う。→パフォーマンスを評価する。→次時の目標をまとめて評価する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">磨く・追求する</div> ・配布されたワークシートに, 生徒指揮者から示された演奏評価に基づいて自己評価を考察し, 記入する。 (録音鑑賞は次時導入) ・ワークシートの提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者は, 生徒指揮者が進行する合奏が円滑に進行するように支援する。 ・授業者は, 生徒指揮者の提示した課題をより明確化し実行可能な方法に繋げられるように補足する。 ・ワークシートを配布し, 生徒指揮者の演奏評価に基づいて自己評価ができるように支援する。 ・活動全体についての本時のまとめを行う(次時や次単元フリーアンサンブルにつながるような視点で)。
備考 スコア(総譜), 録音機, 自己評価カード		

Ⅱ年()組()番()

自分の担当楽器(パート) _____

① 授業者(先生)の総評 と 生徒指揮者からの演奏評価を簡潔にまとめましょう

授業者から

生徒指揮者から

② ①での授業者(先生)と生徒指揮者からの演奏評価を踏まえた上で、自分自身や全体合奏のパフォーマンスで感じたことを、成果と課題に分けて自己評価してみましょう。

(この取り組みは今日で終わりではありませんし、もう少し継続します)

練習を通して向上したこと(成果)

もう少し向上できそうなこと(課題:自分自身・全体 どちらに関する記述でもOK)

実践上の留意点

1. 授業説明

この学年では、Ⅰ年時から器楽活動を継続してきた。Ⅱ年時からは教育課程上の枠組みにより、クラスを1つに統合し展開している。対応するように楽器編成を組み直し器楽合奏活動を行ってきた。教材は、授業者が生徒の発達段階に応じて徐々に技術的難易度が上がるよう工夫し編成している。今年度に入ってから活動の幅を更に広げていく意図で、ジャズ音楽に取り組んだ。9月からの音楽科教育実習生の紹介により、学生自身が高校2年生時に編曲した楽曲を、今回の取り組みでは教材として取り上げた。ジャズの取り組みの延長線上という整合性もあり、若い生徒たちの感性により近い音楽に触れることが可能になった。この授業計画の中で生徒たちに「指揮者リレー」というプログラムを課し、大部分の生徒たちが指揮者を経験した。指揮経験を通し、その後演奏者に戻った際に以前よりも全体を意識して演奏するようになることがねらいであったが、その目標は達成できたと考えている。一人ひとりの違ったアプローチの積み重ねによって確実に楽曲演奏の質が向上していく様子がしっかりと見られた。授業者は、この過程ではあくまで支援者として生徒に関わるように心がけた。

2. 研究協議から

質問＞生徒たちの演奏や指揮者のパフォーマンスの質が高かったことが良かった。全員が指揮経験したのか？

授業者＞残念ながら全員では無かったが、大多数は経験した。

